

# 与助尾根南遺跡

—埋蔵文化財調査センター(仮称)建設に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

1994

茅野市教育委員会

# 与助尾根南遺跡

—埋蔵文化財調査センター(仮称)建設に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

1994

茅野市教育委員会

## はじめに

茅野市には300以上もの遺跡が発見されていますが、その多くが縄文時代の中でも中期と呼ばれる時期のものです。それらの遺跡の多くは八ヶ岳山麓の中でも標高1,000m前後に位置しており、その代表的な遺跡が国の特別史跡に指定されている豊平地区の尖石遺跡です。

与助尾根南遺跡は国の特別史跡である尖石遺跡と、復元家屋で知られる与助尾根遺跡に挟まれた遺跡です。遺跡の中には尖石考古館があり、市内で出土した多くの考古資料を展示しています。考古館の敷地については、昭和53年に南大塙にあった旧尖石考古館が現在地に移転新築する際に発掘調査が行われ、縄文時代前期のはじめの住居址1軒と、中期後半にかけての住居址4軒が発見され、尖石遺跡や与助尾根遺跡との関係の中で、重要な遺跡となっています。また、考古館の東側にあたる茅野市青少年自然の森駐車場造成に際しても調査が行われ、平安時代の住居址が発見されています。

この度、尖石考古館東隣に埋蔵文化財調査センター（仮称）の建設が計画されました。これは市内各地で調査される遺跡から出土する多量の遺物を収蔵保管し、調査研究を行う施設です。

今回の調査はその造成工事に伴う事前の発掘調査ですが、尖石遺跡に隣接する重要な遺跡であるため、前年度の試掘調査に始まり、慎重な姿勢で望みました。その内容については本書に記されているところです。

最後に、調査に参加された関係者の皆様に深く感謝を申し上げ、序文とします。

平成6年3月

茅野市教育委員会  
教育長 両角 昭二

## 目 次

第Ⅰ章 調査経緯	3
第Ⅱ章 遺構と遺物	7
第Ⅲ章 まとめ	13

## 例言・凡例

1. 本書は、茅野市埋蔵文化財調査センター（仮称）の建設に伴う、造成工事に係る与助尾根南（よすけおねみなみ）遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、茅野市教育委員会が実施した。
3. 与助尾根南遺跡の試掘調査は、平成4年4月20・21日に行なった。発掘調査は、平成5年5月24日から6月1日まで行なった。なお、平成2年12月に茅野市青少年の森駐車場造成に伴って、今回の調査区の東側を実施しており、その報告も併せて行なう。  
整理作業は、平成5年12月2日から平成6年3月31日まで行なった。
4. 出土品の整理及び報告書の作成は、尖石考古館で実施した。整理作業にあたっては、尖石考古館の小平恭館長をはじめ、職員の協力を得た。  
本報告書に係る出土品・諸記録は、茅野市文化財調査室に保管されている。
5. 本報告書の執筆は、小林深志が行なった。
6. 今年度の調査については、平成元年度から行なっている尖石遺跡の史跡整備の為の試掘調査において基準点測量を実施していたため、これを延長し、遺構の位置をはっきりさせることができた。なお、平成2年度に実施した調査については、作成した全体図から地形図に反映させる方法を探った。

### 7. 調査の体制

本調査は茅野市教育委員会茅野市文化財調査室が実施した。組織は以下の通りである。

調査主体者	内角昭二	(茅野市教育委員会教育長)				
事務局	原 充	(茅野市教育委員会教育次長)				
	永田光弘	(茅野市教育委員会文化財調査室長)				
	鵜飼幸雄	(茅野市教育委員会文化財調査室係長)				
	内角一夫	(茅野市教育委員会文化財調査室主任)				
	大月三千代	(茅野市教育委員会文化財調査室主事補)				
調査担当	守矢昌文	(茅野市教育委員会文化財調査室主任)				
	小林深志	(茅野市教育委員会文化財調査室指導主事) 調査担当				
	小池岳史	(茅野市教育委員会文化財調査室主事)				
	功刀 司	(茅野市教育委員会文化財調査室主事)				
	百瀬一郎	(茅野市教育委員会文化財調査室主事)				
	小林健治	(茅野市教育委員会文化財調査室主事)				
	柳川英司	(茅野市教育委員会文化財調査室主事)				
調査補助員	赤堀彰子	伊藤千代美	牛山市弥	牛山徳博	占部美恵	小松とよみ
	関 審子	武居八千代	原 敏江	堀内 淳	矢崎つな子	矢嶋恵美子
発掘調査・整理作業協力者	芦田孝子	伊藤京子	牛山みつ江	岡 和宣	栗原 昇	小平千恵子
	小平ツギ	小平房江	小平フサ子	小平三行	小平ヤエコ	小平義市
	白旗スエ子	武田けき子	田中洋二郎	立若貴江子	長田 真	日黒恵子

# 第Ⅰ章 調査経緯

## 第1節 調査に至るまでの経過

弓助尾根南遺跡は尖石遺跡と弓助尾根遺跡に挟まれた小さな尾根にあり、尖石遺跡を中心とした尖石遺跡群を形成している。

本遺跡は、かつて弓助尾根遺跡への見学路を設置する際に住居址1基が発見されている他、尖石考古館建設に際して行われた発掘調査でも住居址5軒が検出されている。時期は縄文時代前期住居址1軒、中期末葉住居址5軒である。これらは今回の調査区の西側に隣接するものである。この他に東側に隣接する地区の調査として、青少年自然の森建設に際し試掘調査を行い、平安時代住居址1軒が検出された例がある。なお、この平安時代住居址については、未発表であったため併せて報告する。

今回、弓助尾根南遺跡の範囲の一部であると考えられる尖石考古館に隣接する東のカラマツ林に、埋蔵文化財調査センター（仮称）の建設が計画された。前述のように、本遺跡からは考古館建設、青少年自然の森駐車場造成の双方の調査で遺構が検出されており、それに挟まれた今回の予定地も、当然遺跡の一部として事前の調査を行う必要があると考えられた。

## 第2節 調査の経過

### 試掘調査

今回の調査を行うにあたっての試掘調査は、平成4年4月20日と21日の2日間にわたって行った。調査面積は2,020m<sup>2</sup>であったが、その約24%にあたる484m<sup>2</sup>を重機によるトレーニングによって表土層を剥ぎ、遺構を検出していった。その結果縄文時代中期後半の曾利式土器を作った住居址を1軒と、時期は不明ながら5基の上坑らしい落込みを検出した。そこで一日調査を終了し、平成5年度予算に調査費を計上するなど準備を進めた。

### 本調査

平成5年度の本調査は、5月20日（木）から行った。

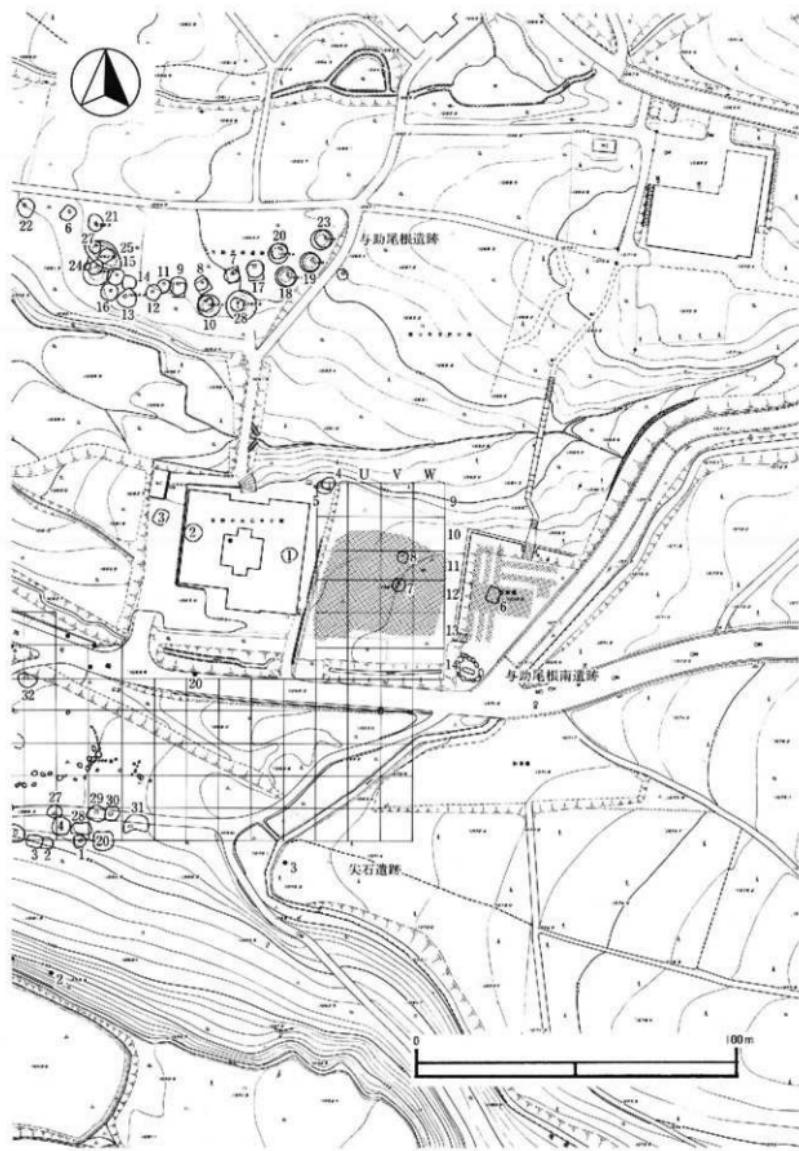
表土剥ぎは試掘時に調査区中央で検出されている住居址を中心にその東側に向かって行い、終了次第西側の表土剥ぎにかかることとする。試掘時もそうであったが、カラマツ林であったため、木の根が多く、抜根と表土剥ぎに時間がかかった。

5月21日（金）晴れ

昨日に引き続き重機による表土剥ぎを行う。東側半分の表土剥ぎをほぼ終了する。

5月24日（月）曇り後晴れ

重機による表土剥ぎは西側に入る。本日より作業員を入れ、遺構の検出・プラン確認を行い、午後から住居址の東側から掘り下げに入る。住居址番号は、平成4年度の試掘調査時にすでに7号住居址として命名されているものである。遺構確認面から縄文土器の大型片が出土しており、遺物の出土に期待するが、覆土内に遺物は少ない。



第1図 地形と発掘区 (1/1,500)

5月25日（火）晴れ

重機による表土剥ぎはほぼ終了する。

7号住居址は掘り下げを継続中。今日になって西側縁の南から縄文土器深鉢の上半部が出土する。また、炉の北辺で一括土器が出土した。写真撮影は炉辺土器を東側から。遺物の時期は、曾利II式。打製石斧も住居址北東から出土している。

尖石遺跡で行った基準点測量の杭を延長し、2本打つ。

5月26日（水）晴れ

表土剥ぎは今日で終了となる。

7号住居址の掘り下げと清掃。午後写真撮影（南から）。平面実測図作成のための釘打ちを周辺に行う。

7号住居址の北側に土坑状の掘り込みがあり、掘り下げたところ、縄文土器の一括土器が出土する。焼土もみられることから、住居址になる可能性がある。

調査区全体の遺構確認のための精査。土坑・ピット状の掘り込みが幾つか検出され、掘り下げるが、ほとんどが不整形で浅く、抜根によるものと考えられる。覆土もロームブロック混じりのボソボソした上層である。

杭のB・M設定。II区V13=1,067.194m、V11=1,066.903m。

5月27日（木）晴れ

7号住居址の平面実測図作成。

昨日住居址になる可能性があるとした箇所からは、か址の他柱穴も検出されたため、8号住居址と命名する。完掘・清掃の後、写真撮影を行う（南から）。

上記2ヶ所の住居址以外には、8号住居址の東側で、土坑が1基検出された。これ以外のものについては、抜根時の擾乱と考えられる。

作業の終了した者から漸次尖石遺跡の試掘調査に入る。

5月28日（金）晴れ

7号住居址のコンタ計測。

8号住居址の平面図作成およびコンタ計測。

上坑の平面図作成およびコンタ計測。

全体図作成。

6月1日（火）晴れ

午前中一杯をかけて調査範囲全体に水を撒き、遺跡全景の写真撮影を行う（南東から及び北西から）。午後土坑の写真撮影（東から）。

機材の撤出を行い、現場での作業をすべて終了する。

6月3日（木）曇り時々雨

朝までの雨で全体が湿っていたため、北西からの遺跡全景写真の撮影を再度行う。

6月11日（金）晴れ

重機による穴埋め作業開始。

6月16日（水）晴れ

重機による穴埋め作業は、本日で終了する。

## 平成2年の調査

茅野市で建設した青少年自然の森進入路と駐車場造成に伴って調査を実施した。調査は重機によるトレーニング調査とし、造構が検出され次第拡張し、調査を行う方法を取った。

12月13日（木）

与助尾根遺跡・与助尾根南遺跡の調査開始。与助尾根遺跡は、北側斜面に3本のトレーニングを開け、造構確認調査を行うが、何も検出されなかった。与助尾根南遺跡は、調査区のほぼ中央から平安時代の住居址が1軒検出された。周囲を拡張した後、掘り下げを開始する。かつての調査で5軒の住居址が検出されていることから6号住居址と命名する。

12月14日（金）

6号住居址の掘り下げ。平面実測図作成。造物取り上げ。

与助尾根遺跡は、全体図作成。

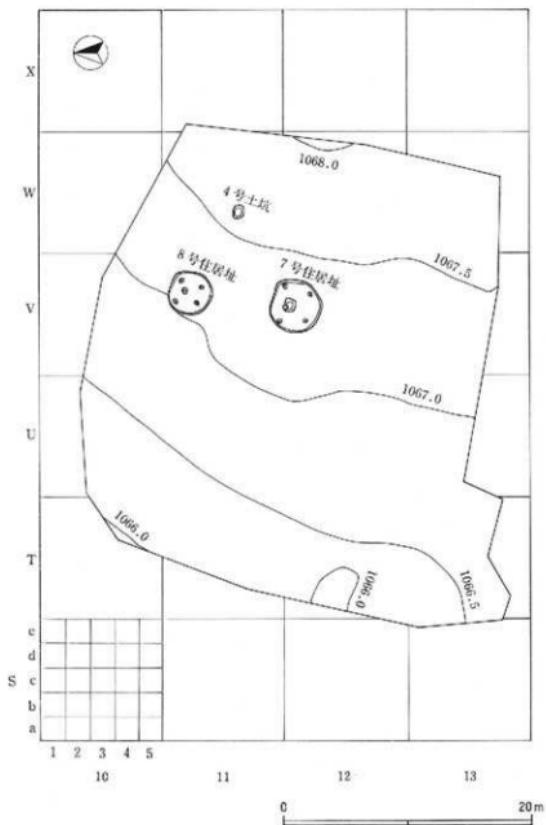
12月15日（土）

6号住居址平面図作成。完掘写真撮影（西から）。エレベーション図作成。調査を終了する。

## 第II章 遺構と遺物

検出された遺構に住居址3軒と土坑1基がある。住居址は縄文時代の住居址が2軒、平安時代の住居址が1軒である。土坑からは遺物の出土はないが、覆土の状態が縄文時代の住居址に類似していることから、同じく縄文時代の土坑として扱っておく。

検出した遺構の番号は、かつて調査した遺構番号に連続して付した。なお、かつての調査において小豎穴としたものの名称を、土坑と改めて報告している。



第2図 遺構分布図(1/400)

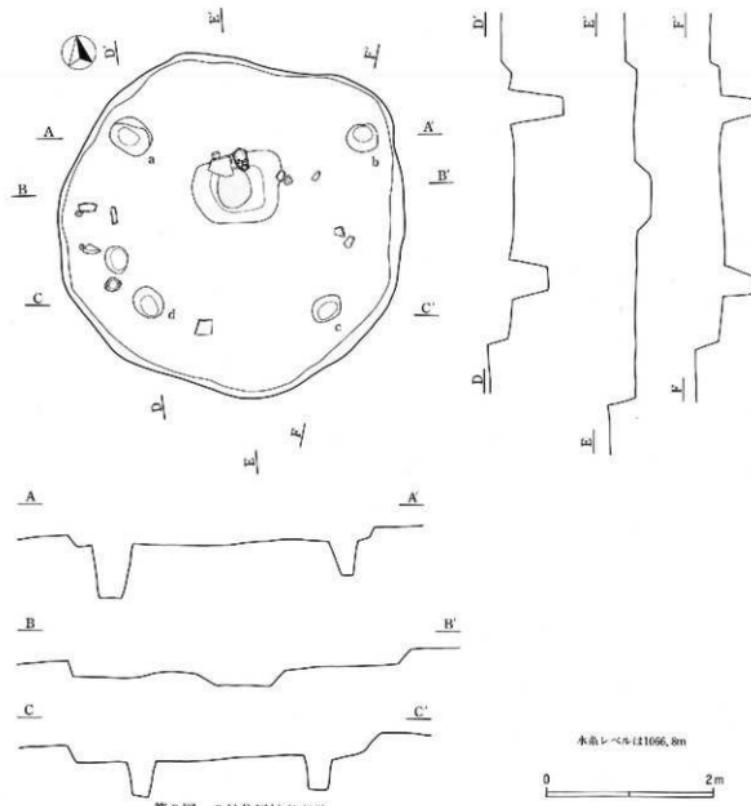
## 第1節 繩文時代

### 1. 住居址

縄文時代の住居址は、2軒が検出されている。

#### 7号住居址（第3図、図版1-2）

II区V-11・12に位置する。平面形態はほぼ円形を呈する。規模は東西が424cm、南北が420cmと主軸に対して僅かに横方向に長くなっている。主軸方向はN-9°-Eを指す。壁高は最も高いところで35cmを測る。床面は、若干の凹凸はあるもののほぼ水平で、とくに柱穴の内側は硬くなっている。壁面は、掘り込みが浅いためあまりしっかりとした壁ではなく、やや傾斜している。また、周溝は検出されなかった。柱穴は4本が検出されている。深さは北西のaが69cm、北東のbが42cm、南東のcが45cm、南西のdが48cmを測る。各



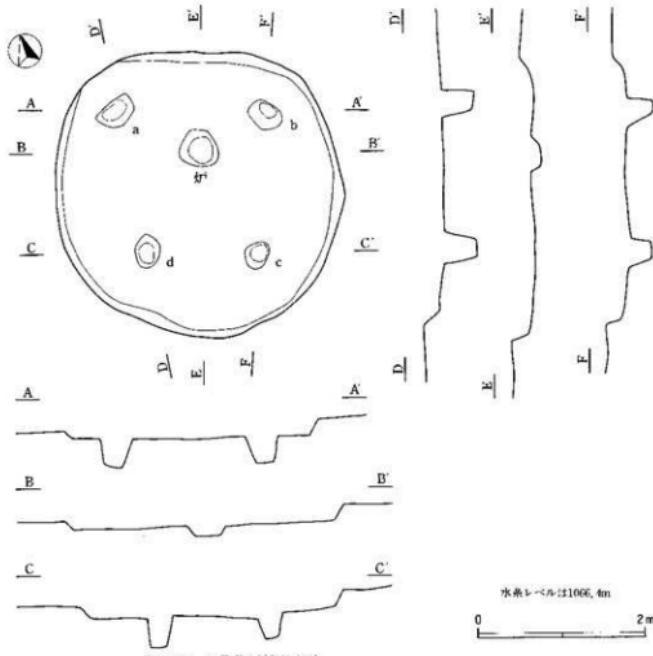
柱穴の距離を見ると、住居の奥にあたると考えられるaとbの柱穴の中心から中心までの距離が285cm、入口側と考えられるcとdの距離が220cmで、奥の方が幅が広くなっている。が埴は中央よりやや奥側である北側に寄っている。石闘がであったと考えられるが、北辺の一部を除き礫が抜き取られている。

覆土は黒褐色上の單一層で、粒子は細かく、縮っているが、粘性はない。極小（1mm以下）のローム粒子を少量含む他、極大（1cm以上）の炭化物を混入する。

遺物は縄文土器（図版2-3～5）、打製石斧、蜂巣石などが出土しているが、量は少ない。炉の北辺から出土した一括土器は、胴下半分の一部を除き、ほぼ完形となる。住居址の南西で出土した深鉢は、口縁部から頸部までのもので、胴部以下は見られない。また、床面からも8cmほど浮いて出土している。この土器の北側からは、蜂巣石が伏せた状態で出土しているが、これも床面から10cm浮いており、どちらも本住居址の廃絶後埋没過程に投込まれたものと考えられる。本住居址及び出土遺物の時期は、出土した土器から中期後半の曾利II式期になると考えられる。

#### 8号住居址（第4図、図版1-3）

II区V-10・11に位置する。平面形態はほぼ円形を呈する。規模は径350cm、壁高20cmを測る。主軸方向はN-16°-Eを指す。床面は抜根のため荒れており、硬い面は少ない。壁はなだらかに傾斜している。また、北西隅は削平され、壁を検出できない。間溝は検出されなかった。柱穴は4本が検出されている。深さは北



第4図 8号住居址(1/60)

西の a が38cm、北東の b が33cm、南東の c が30cm、南西の d が40cmを測る。各柱穴の距離を見ると、住居の奥にあたると考えられる a と b の柱穴の中心から中心までの距離が190cm、入口側と考えられる c と d の距離が135cmで、奥側の方が幅が広くなっている。炉址は中央よりやや奥である北側に寄っており、12cmほどの掘り込みをもつだけである。石圓炉であった可能性もあるが、石はすべて抜き取られている。

遺物は同一個体と考えられる土器片が数点出土しただけであった(図版 2-6)。本住居址の時期は、僅かに出土した土器から曾利III式期と考えられる。

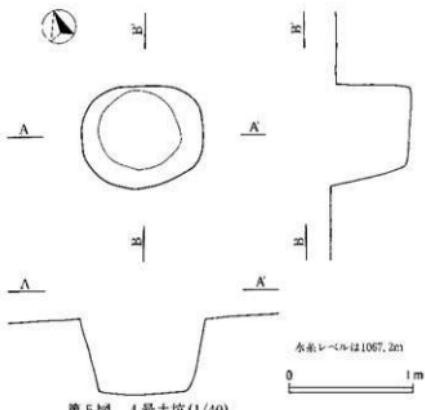
## 2. 土坑

土坑は 1 基が検出されている。遺物の出土はないが、覆土の状態が縄文時代の住居址に類似していることから、同じく縄文時代の土坑として扱っておく。報告したもの以外に、試掘調査時に土坑状の落込みが幾つか検出されていたが、不整形で、掘り込みが浅く、覆土もロームブロック混じりでボソボソであるため、抜根などの擾乱として考え、報告からは除外した。

### 4号土坑(第5図、図版1-4)

II区 W-11で検出された。平面形はやや東西に長い楕円形、底面は円形を呈する。規模は長軸98cm、短軸84cm、深さ62cmを測る。長軸方向は N-73°-W を指す。床面はやや北側に傾斜するがほぼ水平である。壁面は北側の壁がほぼ直立する他は傾斜している。

遺物の出土はなかった。



第5図 4号土坑(1/40)

## 第2節 平安時代

平安時代の住居址は、平成2年度の調査で1軒が検出されている。今回の調査区の東に位置し、青少年自然の森の駐車場造成に際して調査を行っている。尖石遺跡の基準点による調査区の位置は残念ながら正確とは言えない。また、上記の住居址と土坑の主軸方向が座標北からであるのに対し、本住居址の長軸方向及び主軸方向は磁北からのものである。

### 6号住居址（第6図、図版1-5）

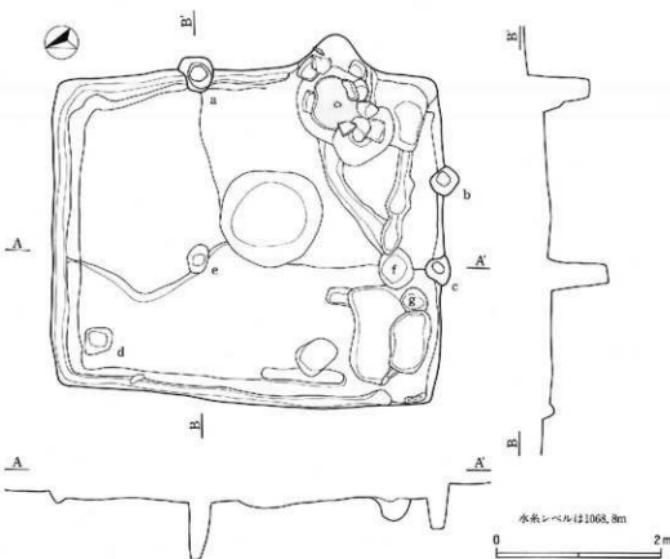
II区Y-12に位置する。平面形態は、南北に長い長方形を呈する。規模は長辺が482cm、短辺が410cm、壁高は最も高いところで25cmを測る。長軸方向は、N-17°-Eを指し、カマドの軸線方向はN-107°-Eを指す。カマドは長辺である東壁の中央より南側にある。カマドの焼土は5cmほどの厚さがあつたが、その下に更に5cmほどの黒色土が堆積していた。

床面はほぼ水平で、特にカマドのある南東隅は硬くよく踏み固められている。周溝はカマドの北側（左）から始まり、北壁・西壁と回っているが、南壁際にはない。南壁より40cmほど内側に南壁に平行に溝があるが、南壁側に拡張している可能性もある。カマドを構築し直した痕跡はないので、南東隅にあったカマドがやや中央に寄った感じとなつたのであろう。

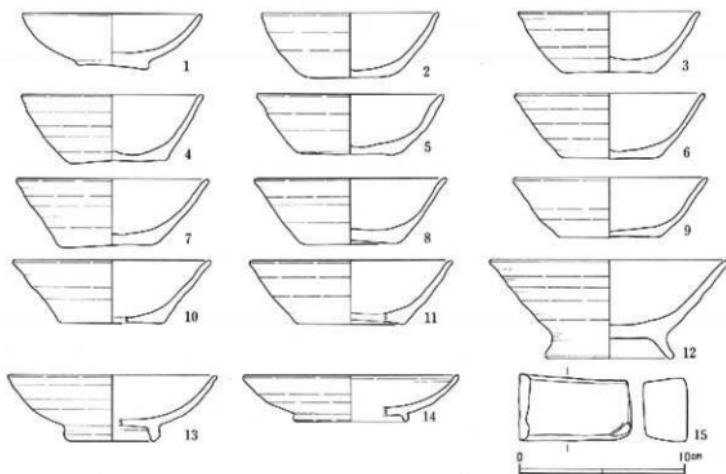
柱穴は、覆土掘り下げ時に東壁に1本、南壁に2本、さらに住居址中央よりやや北に寄ったところに1本の計4本が検出されていた。この4本の柱穴の他、貼り床をした柱穴や土坑もその後に検出されている。

覆土は單一層と理解される。黒褐色土、微細なローム粒子の混入が見られる。粒子は細かいが、粘性や繊りはない。下層はローム粒子の混入が多いが、分層は難しい。

遺物は、復元により完形となるような土師器が多数（第7図1~12、図版2-7~3-8）と灰釉陶器片数点（第7図13・14）が出土した。内面を黒色処理し、暗文のある土器も數個体分見受けられたが、図示に至らなかった。また、葵紋の破片の出土もあったが、復元により図示できたものはなかった。これらの遺物は、特にカマドのある東側に出土が多い。また、鉄製品の出土はなかったが、砥石（第7図15）と鉄錠の出土もあった。



第6図 6号居住址 (1/60)



第7図 6号居址出土遺物 (1/3)

### 第III章　まとめ

本遺跡からは、縄文時代中期後半の住居址が2軒検出された。かつての調査で、縄文時代前期前半の住居址が1軒、中期中葉の炉1基、中期後半の住居址4軒が発見・調査されている。中期後半の住居址は4軒とも曾利Ⅲ式期に位置するものであるが、今回新たに1軒が同じ曾利Ⅲ式期のものであった。またもう1軒はそれよりも一段階古い曾利Ⅱ式期のものであり、本遺跡が尖石遺跡の人口の増加などで一時的に膨張したものではなく、継続して営まれた集落である可能性を持っていると言える。もちろん同時に存在した尖石遺跡や与助尾根遺跡の集落と密接な関係があったことは言うまでもない。

土坑は、遺物の出土はなかったものの、覆土が上記の縄文時代のものとはほぼ同じであったことから同じく縄文時代のものとした。なお、昭和53年度の調査では陥れ穴が2基検出されているが、今回の調査区内では検出されていない。この様な遺構は複数が、ある程度のセットとなっていると考えられるが、今回の調査区までは及んでいないようである。

本遺跡に隣接する尖石遺跡と与助尾根遺跡の間は、湧水によって形成された浅い湿地状の谷によって隔離されている。かつて考古館建設に際して行われた本遺跡の調査でも、その谷に流れ込む湧水が検出されている。本遺跡と尖石遺跡は、この湧水のため浸食されできた浅い谷により両面で隔離されている。この谷の始まりは今年度の調査で尖石考古館のすぐ東側で確認できている。これより東側に行くと川筋はなくなり、尖石遺跡と地形的には一体のものとなっている。

本遺跡の調査終了を待って引き続き行われた尖石遺跡の試掘調査では、遺跡北側の調査が行われたが、予想以上の住居址をはじめとする遺構の検出があり、調査者を驚かせた。近年の尖石遺跡の試掘調査の成果によれば、縄文時代中期の前半は遺跡の西側に遺構が分布しているが、後半になると遺跡の中央から東側に分布が集中していくような傾向を見て取れる。前述のように、遺跡内に見られる小さな谷状の地形もその東側ではなくなり、本遺跡と尖石遺跡との境が明瞭でなくなるが、縄文時代中期後半にどの程度までこの2遺跡が意識されていたか興味あるところである。

尖石遺跡も近年の数次にわたる試掘調査で、全体が平坦となっているのではなく、水が流れたかどうかは別として、深い谷が2本ほど入っていることが確認されている。もっとも、尖石遺跡内に存在する谷は、いずれも小さなもので、しかもその始まりが道路内になるものである。現地形を見ても多少の起伏が認められる程度である。

この様な小さな谷が遺跡の立地にどの様な影響を与えたかは、今後広場と考えられている遺跡中央の調査を待たねばならないが、その調査結果によっては尖石遺跡も大きく3ヶ所に別れる可能性も出てきている。

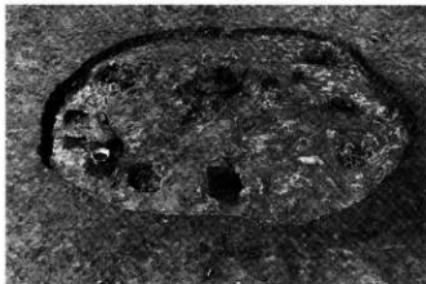
与助尾根南遺跡では、平安時代の住居址の検出もあった。遺物は、甕類に復元できたものはなかったが、土師器の环にはほぼ完形で出土したものが多く、まとまった資料となつた。時期的には八ヶ岳山麓で検出される平安時代の住居址と同じく、10世紀後半から11世紀前半に位置付けられるものと考えられる。

平安時代の住居址は、尖石・与助尾根・竈神平・竈神平下遺跡を含めた尖石遺跡群で見ても今のところ唯一の検出例である。こうした平安時代の住居址が単独で検出される例は、尖石遺跡群のある台地の南側にある鶴山遺跡をはじめ、市内各遺跡で検出されている。こうした平安時代住居からは、意外と多くの遺物が出土している。今回報告した6号住居址についても、土師器や灰釉陶器が多数出土している他、砥石や鉄片が

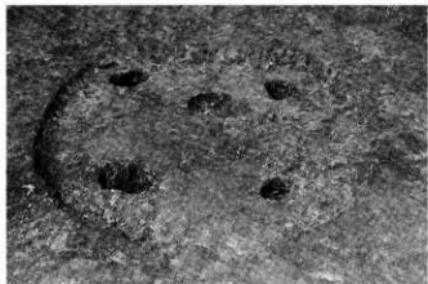
出土しており、鉄製品を持っていたことは明らかである。これら単独で検出される住居が、なぜ突如として出現し、また継続することなく途絶えてしまうかは、今後明らかにせねばならない課題である。



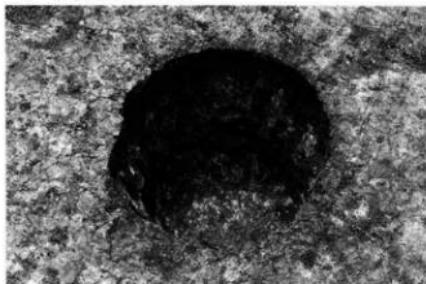
1 遺跡全景（北西から）



2 7号住居址（南から）



3 8号住居址（南から）



4 4号土坑（東から）



5 6号住居址（西から）



1 7号住居址炉胎土器出土状态



2 7号住居址西侧土器·蜂巢石出土状态



3 7号住居址出土遗物(1)



4 7号住居址出土遗物(2)



5 7号住居址出土遗物(3)



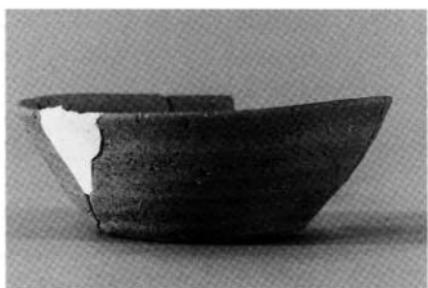
6 8号住居址出土遗物



7 6号住居址出土遗物(1)



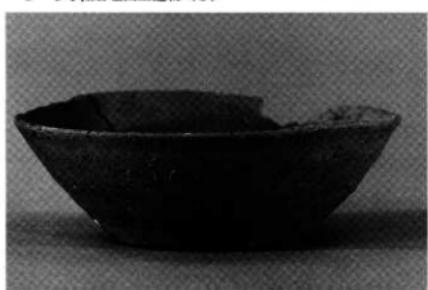
8 6号住居址出土遗物(2)



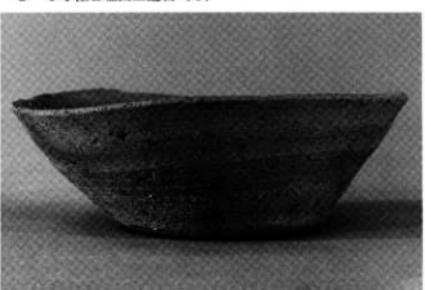
1 6号住居址出土遗物 (3)



2 6号住居址出土遗物 (4)



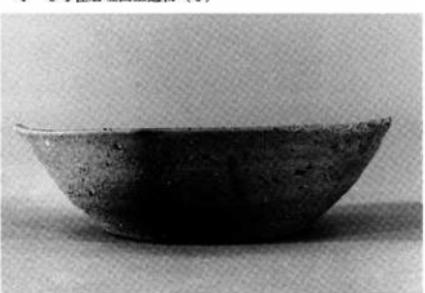
3 6号住居址出土遗物 (5)



4 6号住居址出土遗物 (6)



5 6号住居址出土遗物 (7)



6 6号住居址出土遗物 (8)



7 6号住居址出土遗物 (9)



8 6号住居址出土遗物 (10)

---

## 与助尾根南遺跡

—埋蔵文化財調査センター(仮称)建設に伴う  
埋蔵文化財緊急発掘調査報告書—

---

平成6年3月20日 印刷

平成6年3月24日 発行

編集 茅野市教育委員会  
発行 茅野市教育委員会  
長野県茅野市原原2丁目6番地1号 (0266)72-2101(代)  
印刷 ほおづき書籍株式会社  
長野県長野市柳原2133-5 (0262)44-0235

